

〈原著〉

フランシス・ベーコンのスピリットの視野 — 想像の力からスピリットを守ることによる長生 —

藤 井 義 博 (藤女子大学 人間生活学部 食物栄養学科・藤女子大学大学院 人間生活学研究科 食物栄養学専攻)

本研究の目的は、哲学者フランシス・ベーコン (1561-1626) の最後の著作である“シルバ・シルバールム”において、身体の内発的な主体性を特徴とするスピリット論を分析することにより、ベーコンの生活の組織化と感情の管理による長生法におけるスピリット論の意義を明らかにする試みであった。

ベーコンは、人の知は自然の過程の視覚的把握によるものであり、自然の過程は自然の過程に内在している不可視物により主に支配されており、この不可視物の探索なしに自然の過程のいかなる真の分析も指摘も不可能であるとの感得に基づいてスピリット論を構築した。ベーコンは、従来の人々の知は神が創った自然の過程の探索を行わず、ピタゴラスの哲学にはじまる恣意的な想像物の論理の言葉による想像の行為と信念の行為をもたらしていると認識していた。ベーコンの“シルバ・シルバールム”は、自然の過程の探索による人の知を促進するために、収集した多様な自然の過程をスピリット論によって説明するものであった。とりわけ人のスピリットの全般的交感の指摘は、自律神経機能による脳-体のコミュニケーションに関するポリヴェーガル理論の予想であることとらえることができる。ベーコンの生活の組織化と感情の管理による長生法は、人の自然の過程を支配するスピリットの働きを人の想像の悪影響から守ることに基づいている。それは、無意識の脳覚が安全を汲み取った後の有髄迷走神経の働きによる社会的関与の実現を育むことであるとポリヴェーガル理論より説明することができる。

キーワード：プロセルピナ寓話、能動的物質、集合的無意識、無意識の脳覚、ポリヴェーガル理論

1. はじめに

英国の哲学者フランシス・ベーコン (1561-1626) は、意図した諸科学の再構築の実現を目指して、“新オルガノン” (the *Novum Organum*) によって彼の哲学のプロジェクトの計画と目的を示すとともに、“自然誌”の刊行を通じて実際の具体的な検証・推進方法を公表して人々による彼の新哲学の実践と普及を促進しようとした。そして6つの“自然誌”の中でもとりわけ長生のための生活法 (以下、長生法と呼ぶ) をテーマとする“生と死の自然誌” (*Historia Vitae et Mortis*) を重視した。ベーコンの長生法の特徴は、生活の組織化と感情の管理にある¹⁾。ベーコンは、従来の主に食物を介して身体部分を保持・回復する方法に加えて、新たに身体の内発的な主体性であるスピリットを若く保持

しそれを回復するという方法を提唱した^{1), 2)}。ベーコンによるスピリットは、能動的な人格としての原初物質からなる複合物質として物質に内在し、身体の内発的な主体性をにう存在である³⁾。

“シルバ・シルバールム”は、ベーコンの最後の著作であるとともに、彼の著作のなかでは、唯一スピリットについての持続した一般的議論が行われている著作である⁴⁾。本論文は、“シルバ・シルバールム”において、身体の内発的な主体性を特徴とするベーコンのスピリットを分析することにより、ベーコンの生活の組織化と感情の管理による長生法におけるスピリット論の意義を明らかにする試みであった。

2. 資料と翻訳

“シルバ・シルバールム” (*Sylva Sylvarum: or A Natural History*) のテキストは COLLECTED WORKS OF FRANCIS BACON, Volume II Part I, Part II (Routledge/Thoemmes Press, London, 1996.) を用いた。これは、The Works of Francis Bacon (collected and edited by James Spedding and Robert Leslie Ellis, and Douglas Denon Heath, 1879) のリプリント版である。

“古代人の知恵について” (*De sapientia veterum*) とその英語訳の *Of the wisdom of the ancients* のテキストは COLLECTED WORKS OF FRANCIS BACON Volume VI Part II, Routledge/Thoemmes Press, London, 1996 (1878 年版のリプリント) を用いた。

上記の資料からの引用の日本語訳は、すべて著者による。

3. シルバ・シルバールム

“シルバ・シルバールム”は、ベーコンによって書かれ、ベーコンの死の 1 年後の 1627 年に彼のチャプレンの E. Rawley によって刊行された著作であり、観察された自然の過程すなわち身体を含む自然現象を集めたものである。“シルバ・シルバールム”は、観察された自然の過程についての通し番号の付された 1,000 のパラグラフを中心に構成されている。パラグラフは全体として 1 世紀 (Century I) から 10 世紀 (Century X) までの 10 章に分けられ、それぞれの世紀は 100 パラグラフを含んでいる。各世紀は、実験 (Experiment) で始まるタイトルが付けられた 1 ないし数パラグラフからなるセクションに分けられている。セクションによっては長短の解説が付されている。

1879 年版の編集者の一人である R. L. Ellis による序文からは、刊行後約 250 年が経過した 19 世紀後半における“シルバ・シルバールム”の評価を垣間見ることができる。すなわち「ベーコンの最後の著作ということで 17 世紀にはポピュラーな書籍であったが、その後は長らく死に絶えている。」と Ellis が総括をしているように、“シルバ・シルバールム”は後の時代の読者には支持されなかった。その原因について、「科学的概念が徐々に拡散するにつれて、孤立したあるいはほとんど関連のない事実についての好奇心は、徐々に薄れた。事実がどれほどすばらしく見えようとも、それが知性的に説明され得るときには、現象に私たちが感じる関心は相当損なわれる。(傍点引用者)」と述べ、その内容について、「一つ以上の事実の表明を含み、観

察された現象の原因を多少なりとも説明する傾向の意見を概して伴っている。事実そのものは種々の資料に由来しており、ベーコン自身の観察もあれば、恐らく口頭の報告もあり、残りは書籍に由来する。(傍点引用者)」と述べている。このように“シルバ・シルバールム”は、確立した科学的概念を示す著作ではなかった。

タイトルとしての“シルバ・シルバールム”の意味については、二人の編集者の間で見解が異なっている。「シルバは、すべてが構築される物質を示すギリシア語のヒューレーであり、シルバ・シルバールムは、最善のシルバを意味するように思われる。」との Ellis の見解に対して、もうひとりの編集者の Spedding は、「シルバ・シルバールムの名前は、収集物の収集を意味すると取るべきである。すなわち多様なシルバ (特定の主題に関係する事実の収集) を集めたもの。」との注釈を加えている。“シルバ・シルバールム”は、タイトルからして人々の理解が及びにくいものであった。

しかしながら“シルバ・シルバールム”を刊行したベーコンのチャプレンである E. Rawley の序文を読むと、その印象は一変する。なぜなら彼は、ベーコンの言葉を引用してその刊行目的を明示しているからである。すなわちベーコンが「個別的事象の未消化の堆積のように見えるかもしれないもの (引用者注: シルバ・シルバールム)」を刊行するのは、彼が「人々の善」を優先することに決意したからである。そして生前のベーコンが普段語っていた言葉を引用することで序文を締めくくっている。「この自然誌 (Natural history) の研究は、人ではなく神がつくったままの世界である。なぜならそれは想像 (imagination) の何ものをも有していないからである。」このベーコンの言葉は、“シルバ・シルバールム”におけるスピリットの分析において、「想像」が重要なキーワードであることを示唆している。

4. 本論文で吟味する“シルバ・シルバールム”の内容部分

スピリットを分析するという本論文の目的を追求するために、個々のパラグラフだけでなくセクションの解説にも注目することで、吟味すべき部分として、以下の 4 つのパラグラフと 2 つの解説を抽出した。①自然の密かな過程についての一世紀パラグラフ 98. (pp. 380-382)、②感覚の無い物体における知覚についての九世紀解説 (pp.602-602)、③非物質的効力と想像力の伝承と流入についての十世紀解説 (pp.640-641)、④想像の定義についての十世紀パラグラフ 945. (pp.653-

655) と想像力とスピリットの関係についてのパラグラフ 957. (pp.659-660)、⑤経験からの受容についての十世紀パラグラフ 999. (pp.671-672)、⑥人のスピリットの全般的交感についての十世紀パラグラフ 1000. (p. 672)。以上の6つの部分に加えて、さらに一世紀パラグラフ 98. において言及されている“古代人の知恵について” (*De sapientia veterum*) の中のプロセルピナ寓話 (XXIX. PROSERPINA; OR SPIRIT) を本論文では採りあげて吟味した。本論文の各論点の解説には、それぞれ対応する“シルバ・シルバールム”と“古代人の知恵について”の引用部分を斜体文にて掲げた。

5. 自然の密かな過程

(1) 自然の密かな過程について述べる一世紀パラグラフ 98. では、人の知が自然の過程の視覚的把握に基づくこと、それゆえに不可視物についてはほとんど探索されていないことを指摘している。しかし自然の過程は主に自然の過程における不可視物が支配していることから、不可視物の探索なしに自然の過程の真の分析や自然の進行についての指摘は不可能であることも指摘している。

人の知は、視覚によって規定されてきた。それゆえ物体自身の繊細さ、部分の小ささ、運動の些細さにおいて見えないものは何であれ、ほとんど探索されていない。しかしこれらは主に自然を支配する事物であり、それなしでは自然の過程についてのいかなる真の分析も指摘も不可能である。

(2) 従来、自然の過程は不可視物ではなく単に論理の言葉によって説明されてきたことをベーコンは“生と死の自然誌”において問題にしている²⁾。自然の過程は、自然の過程に含まれている不可視物によって支配されていると把握するところに彼の自然哲学の特徴がある。ベーコンは、自然の過程を支配している不可視物をスピリットと呼ぶ。このスピリットは、既存の類似の概念である真空、空気、熱や火、見える部分の効能や特質、植物や動物の魂ではないことを断言している。

スピリットすなわち気性物 (*pneumatics*) は、すべての有形物体 (*tangible bodies*) の中にあるが、ほとんど知られていない。それらは時には真空と間違われるが、最も活動的な物体であり、空気と間違われるが、それはワインと水、木と土ほどに顕著に異なっている。また自然の熱 (*natural heat*) や火

の要素の部分 (*a portion of the element of fire*) と間違われるが、スピリットには粗野で冷えた物もある。見える有形部分の効能 (*virtues*) や特質 (*qualities*) と間違われるが、スピリットはそれ自体物 (*things by themselves*) である。そして植物や動物の魂 (*souls*) と間違われるが、それは塗り物 (*paintings*) に過ぎないときに内在物 (*things inward*) を教える見越し (*prospectives*) のように浅い推理物 (*superficial speculations*) である。

(3) スピリットは人の想像の言葉ではなく物質であることを強調している。ベーコンにとって物質は、物質としてのスピリットとスピリット以外の部分からなり、後者は物質の機能の主体ではないことから「愚鈍な有形部分」と呼んでいる²⁾。物質におけるスピリットとスピリット以外の部分の関係および自然の過程におけるスピリットの働きについて次のように述べている。

これ (引用者注: スピリット) は、言葉の問題ではなく、無際限に自然における物質の問題である。なぜならスピリットは、ある割合で希少化されて、外皮のような物体の有形部分に含まれている自然の物体である。そして密度の高い部分すなわち有形部分と同様にお互いに異なっている。そしてどのようなものであれ大なり小なりすべての有形物質 (*tangible bodies*) の中にある。そして決して (ほとんど) 休息することなく、自身からそして主にその運動から乾燥 (*arefaction*)、液化 (*colliquation*)、消化 (*concoction*)、成熟 (*maturation*)、腐敗 (*putrefaction*)、再生 (*vivification*) と自然の効果の多くが進展する。

このようにベーコンは、乾燥、液化、消化、成熟、腐敗、再生など多く自然の効果は、主にスピリット自体あるいはその運動により進展するスピリット以外の有形部分とスピリットの間の相互作用であることを指摘している。

(4) 物質が不活動の有形 (可視的) 部分と活動的な無形 (不可視の) のスピリットからなる根拠として、ベーコンは自身の著作の“古代人の知恵について” (*De sapientia veterum*) のなかのプロセルピナ寓話に言及する。そして冥府の統治におけるプルートルとプロセルピナをそれぞれ不活動の有形部分と活動的なスピリットに対比している (プロセルピナ寓話についての検討は、次章にて行う)。

“古代人の知恵について” (*De sapientia veterum*) のなかのプロセルピナ寓話において考えたように、地獄の統治においてプルートはほとんど何もせずほとんどはプロセルピナがしていることを聞くだろう。なぜなら物質の有形部分は愚鈍な物であって、スピリットが (実際) すべてを行っているからである。

ベーコンがプロセルピナ寓話からスピリットの存在を読みとるのは、それが彼にとって古代人による自然の過程の物質的な把握にほかならなかったからである。プラトンやアリストテレスのように自然の過程を単なる言葉という抽象物質で説明する前のほとんどすべての古代の詩人・哲学者は、自然の過程は「活動し、形を持ち、形を授け、自身の内に運動の原則を有する」物質によると表明することにおいて共通していたことをベーコンは指摘している³⁾。

- (5) 当時の化学者と医師による物体の研究の現状についてベーコンは、ある程度の進展を認めているものの、その物質研究では自然の過程の推進者である物質の不可視の部分すなわちスピリットの状態、効果、運動については全く観察されておらず、従来の伝統にならって、効能、行為、情念など物質的裏づけのない単なる論理だけの言葉を用いて説明していることを指摘している。このうち医師の現状については、“生と死の自然誌”のなかでも指摘している²⁾。

6. プロセルピナ寓話とスピリット

“古代人の知恵について”の中でベーコンは、プロセルピナを「プロセルピナすなわちスピリット (spirit)」のタイトルの下に 29 番目の寓話として採りあげている。プロセルピナは、ギリシア神話のペルセフォネと同一のローマ神話の女神であり、ジュピター (雷神) とケレス (農業の女神) の娘で、プルート (冥府の主) の妻である。このタイトルが示しているように、プロセルピナ寓話を物質におけるスピリットの由来、物質とスピリットの関係とベーコンは把握している。プロセルピナ寓話の内容の全体を提示した後、個々のエピソードごとにスピリットとの関係を論じている。本論では、まずベーコンが提示したプロセルピナ寓話のポイントを箇条書きに整理して提示し、その後で論点を吟味する。

ベーコンが示しているプロセルピナ寓話の内容のポイントは以下の通りである。

- ①ケレスの娘であり美しい処女のプロセルピナは、谷間で水仙の花 (flowers of Narcissus) を摘んでいるときに、プルートによって力づくで冥府に奪い去られた。
- ②プロセルピナは、冥府では恭しくもてなされ、冥府の女王とさえ呼ばれた。
- ③いとしい娘の失踪に悲しみと不安で一杯の母ケレスは、燈った松明を手にもって娘を探して世界を放浪した。
- ④プロセルピナが冥府に連れ去られて幽閉されていることを聞き知ったケレスは、ジュピターと相談し、もし娘が黄泉の国の物を何も食べていないのなら母は娘を連れ戻せるとの合意を得たが、プロセルピナは柘榴を三粒食べていたため願いを叶えることができなかった。
- ⑤しかしケレスとジュピターとの間において、プロセルピナは地上と地下の間で、年を分けて交互に六ヶ月ずつ、夫 (プルート) あるいは母とともに生活することが合意された。
- ⑥その後テッセウスとピリトスによりプロセルピナを冥府から連れ出すという大胆な試みが企てられたが失敗に終わり、プロセルピナは地下の世界の女王にとどまった。
- ⑦広大な暗い森に自生する宿り木の黄金に輝く枝をプロセルピナへの贈り物として持ってきた者には、冥府に行き帰る権利が与えられた。この枝は、幹がなく多様な木々についている宿り木の枝であった。引き抜かれた枝の代わりに、別の宿り木がそのあとにやってきた。

- (1) ベーコンは、プロセルピナ寓話が大自然に関わるものと捉えていることを表明している。そしてこの寓話は、地下世界から地上世界に向かって成長し地上世界から地下世界へ回帰して解消する自然の過程をもたらしている地下世界の活動力の供給を説明するものであると述べている。

この寓話は、私はそのように取るのだが、大自然 (*Nature*) とかかわりがあり、地上世界のすべての成長が地下世界から湧き起り、そしてすべてが地下世界に帰ってきて解消されるが、この地下世界のなかに存続している活動力の豊かで実りの多い供給について説明している。

- (2) 古代人にとってプロセルピナはスピリットを意味したことをベーコンは表明している。

プロセルピナによって古代人は、暴力によって地

上から分離され、(プルートーにより表現される) 地下に閉じ込められ幽閉されているエーテル状のスピリットを意味した。

- (3) ベーコンは、大地を物質とみなしている。それゆえ地下世界のスピリットは、物質がスピリットの合意なしに略奪により獲得したものと述べている。

このスピリットは略奪されたものとして再現されている。すなわち大地によって突然に無理やり運び去られたものである。

- (4) プロセルピナ(すなわちスピリット)が呆然(torpor)、ぼんやり(stupor)を語源とする水仙(Narcissus)の花を摘んでいるときに略奪されたと古代人が表現しているのは、地上のスピリットが丁度固まり始めたときを示すためであると述べている。

プロセルピナは谷間で水仙の花を摘んでいるときに略奪されたと美しく付加されている。なぜなら水仙(Narcissus)は、呆然(torpor)、ぼんやり(stupor)からその名前を取っているからである。それは凝固を始めたときだけが、呆然となるように、スピリットは地の物質によって捉えられ運び去られるのに最善の状態にあるからである。

水仙 narcissus はまた、その麻酔的性質により、催眠薬 narcotic の語源でもある。

- (5) プロセルピナが地下の女王と呼ばれることをベーコンは、スピリットの特徴から肯定している。

プロセルピナは、地下の女王と呼ばれる他の神のどんな妻にも許されていないような名誉をもっていてもまた正しい。なぜなら実際にスピリットは、愚かで無知なプルートーの手助けなしに、この地域におけるすべてを支配し管理しているからである。

- (6) 娘を探して世界中を放浪する母ケレスが手に燈った松明は太陽を意味するとベーコンは表明している。

この間空気と天空領域の勢力(セレスで代表されている)は、無制限の努力をもって、勝ち取りこの幽閉されたスピリットを回復しようと努める。そし

て空気が運ぶあの松明—セレスの手の燈された松明—は、地上のすべてにランプの働きをなし、もし可能ならプロセルピナの回復にこれ以上のものはないところの疑いなく太陽を意味する。

- (7) ベーコンは2種類のスピリットすなわち無生物スピリット(the non-living spirits)と生物スピリット(the vital spirit)を区別している²⁾。無生物スピリットは、石などの有形物質(tangible substance)すべてにおいて、粗野な物体(the grosser body)のなかに潜み、取り囲まれて存在していて、有形物質の消耗と分解を将来するスピリットである。一方、生物スピリットは、動物や人のような生命体(living things)すべてにおいて無生物スピリットとともに存在しているスピリットである。

プロセルピナが冥府にとどまる2つの様態を、無生物スピリットと生物スピリット(the vital spirit)の様態にベーコンは対応させている。すなわちプルートーにより略奪されたプロセルピナが冥府に幽閉される状態は、金属やミネラルのなかに閉じ込められている無生物スピリットの様態であり、プロセルピナによる柘榴の味わいが意味する自発的で自由な食物摂取は、植物や動物にとどまることに落ち着いている生物スピリットの様態であるとしている。

プロセルピナは彼女の居るところに固定されている。その理由と様態はジュピターとケレスの2つの合意において正確にかつ称賛すべく述べられている。なぜなら最初の合意に関しては、スピリットを固い地の物質のなかに閉じ込め規制する2つの方法があることは確かであるからである。一つは、単純な幽閉と暴力である閉塞と閉鎖による。もう一つは、自発的で自由なふさわしい食物の提供による。なぜなら幽閉されたスピリットが摂取し滋養を開始するとき、最早急いで逃げず、自身の地のように定住するからである。そしてこれがプロセルピナの柘榴の味わいが意味することである。もし彼女がそうしなければ、彼女を探すためにセレスが松明を手に地球を横断したときにセレスによって遠い昔に運び去られていたであろう。なぜなら金属やミネラルのなかに閉じ込められているスピリットは、逃亡が主に恐らく物塊の堅固さによって防止されているものの、植物や動物に閉じ込められているスピリットは、穴のある物体の中にあり、味わいの過程によってとどまることに落ち着かなかつたなら、簡単に逃亡できたからである。

- (8) プロセルピナに関するケレスとジュピターの間の第二の合意の意味については、地下のスピリットが夏には成長する野菜となって地上に住み、冬には枯れて地下に引退することの描写であると説明している。

二番目の合意については、それは年の分割のエレガントは描写にほかならない。なぜなら地中に拡散しているスピリットは、夏の月には上世界の中に住み(野菜の王国に関して)、冬の月は地下に引退するからである。

- (9) テッセウスとピリトスによって企てられたプロセルピナを冥府の部屋から連れ出すという大胆な試みが失敗に終わったことの意味については、プロセルピナが地下の世界の女王にとどまったことは、多くの物質においてスピリットが脱出できないために、そこでスピリットが増加することであると説明している。

さてテッセウスとピリトスのプロセルピナ救出の試みについてその意味は、多くの物質において地を下っている繊細なスピリットはしばしば引き出し同化し地下のスピリットを選び去ることができず、逆にそれ自身凝固して再び上昇できず、それゆえプロセルピナの人々の数を増加し彼女の帝国を拡張する。

- (10) プロセルピナへの贈り物として広大で暗い森の中の自生する宿り木の黄金に輝く枝を持ってきたものには、冥府に行って帰る権利が与えられたことの意味については、賢者の石による死からの身体の生還であるとする錬金術師の解釈に反論することは困難だと述べている。

黄金色の枝に関しては、私は、錬金術師のその同じ石(引用者注：賢者の石)によって金の山(引用者注：賢者の石による金の製出)のみならず、冥府の門からの自然の身体の生還を彼らが約束しているのを鑑みると、彼らがそちら側から私を攻撃するならば、錬金術師に抵抗することは困難に思われる。

- (11) しかし錬金術師らの理論には根拠がなく、その実践は成功していないことから、ベーコンは身体の死からの生還の意味について私見を述べると表明している。

にもかかわらず飽くことなくその石を捜し求める錬金術師らについて、理論において彼らは根拠を有していないことを確信している。それゆえ彼らは実践において成功するよい誓約を有していないのではと思う。それゆえに寓話の最後の部分(引用者注：プロセルピナへの贈り物として黄金に輝く枝を持ってきたものには、冥府に行って帰る権利が与えられたことすなわち生理的身体の死からの生還)の意味についての私の見解を述べる。

- (12) 古代人が共通して生理的身体の保持とそのある程度の回復について、難解で手立てがないことではあるが、不可能なことではないとみなしていたことには満足していると表明している。そしてそれが、古代人がプロセルピナ寓話において、広大な深い森の無数の他の枝の間に黄金に輝く枝を位置づけた意味であると述べている。

多くの比喩的な言及から古代人は自然の身体(引用者注：生理的身体の)の保持とある程度の回復は絶望的なことではないが、難解であり方策外のこととみなしていたことに私は満足している。そしてこのことが、広大な深い森の無数の他の枝の間にこの枝を位置づけることによって、この文章の中で彼らが意味していることだと私はとる。

- (13) 生理的身体の死からの生還を可能にする黄金の宿り木の黄金にベーコンは、生理的身体の持続の象徴を見ている。そしてそれが接木されることに、生理的身体の長生の達成は単純な薬や方法ではなく学術(アート)の探求の必要性を見ている。

彼らはそれを黄金色とした。なぜなら黄金は持続の表象である。それは接木される。なぜなら問題となっている効果(引用者注：保持とある程度の回復の効果)は、単純で自然な薬や方法ではなく、アートの帰結として探求されるべきものであるからである。

ベーコンは、1623年に刊行した人の長生と若返りについての“生と死の自然誌”(Historia Vitae et Mortis)における長生法への取り組みについて、自然の力のある過程を緩やかにし後戻りさせるような偉大な仕事は、朝の一杯や貴重な医薬の使用により完遂し得るものと想像することをやめるように警告している²⁾。

7. 物体と知覚

- (1) 感覚の無い物体における知覚についての九世紀解説 (pp.602-602) において、人、哺乳動物、脊椎動物、無脊椎動物、生物、植物、鉱物など生物、非生物を問わずすべての物体 (有形体) は、感覚を持たなくても知覚を持っていると表明している。

すべての物体 (*all bodies*) は、感覚 (*sense*) を持たなくても、知覚 (*perception*) をもっている。なぜならある物質が他の物質に接すると、心地のよいものを抱いて気持ちの悪い物を排除し追放するする一種の選択があるからである。そして物体が変化させるものであろうが変化を受けるものであろうが、知覚が実践に先立っている。なぜならそうでなければすべての物体は互いによく似たものになるからである。ある種の物体においては、この知覚は、時としてそれと比べると感覚は鈍なものになるほど、感覚よりもはるかに繊細である。

ここでは知覚 (考慮) する能動的物質という物質観が表明されている。この感覚 (*sense*) と知覚 (*perception*) についてのベーコンの表明についてホワイトヘッド (1861-1947) は、知覚は考慮 (*taking account of*) であり、感覚は認知経験 (*cognitive experience*) であり、この点においてベーコンは、最終的に 17 世紀を支配する物理学に沿った思考すなわち外からの力に作用される受動的物質 (*passive matter*) という思考の外に在ることを指摘している⁵⁾。この能動的物質という考えは、ベーコンの出発点であったというよりも彼の思索の発展過程で固まってきたものである。なぜなら 1612 年頃の原稿である「原則と起源について」 (*De principiis atque originibus*) におけるベーコンは、物質は能動的物質であると表明しているものの、1609 年刊行の「古代人の知恵について」 (*De sapientia veterum*) におけるベーコンは、物質は能動的物質である側面と「宇宙の秩序と美を形成している運命かつ必然の法則」に支配されている受動的物質でもある側面の両者を有していると述べているからである³⁾。

- (2) 物質の有する知覚を探求することにより、自然の開示と自然の予言が可能になることを指摘している。

より繊細な知覚の探求は、感覚と同等の時には感覚よりもよく自然を開示するもうひとつの鍵である。さらに、それは自然の予言の主要な手段である。

なぜならこれらの知覚において早期に現れるものが長く時間の経過した後で巨大な効果においてやってくるからである。それは隠れている物を発見するだけでなく来るべき物を予言することに役立つ。

ベーコンによる物質の有する知覚の探求は、物質の中のスピリットに焦点を当てることで自然の過程を把握するという方法である。それゆえ人体のスピリットに焦点を当てることで人体の生理学的過程を把握するならば、人体の瞬間的、断片的な理解のみならず、その過程が時間軸に沿って展開していく過程をも知ることができることを意味している。このような生理学に基づいた医学は、疾病の現症 (*present illness*) の開示が診断 (*diagnosis*) となり、この現症の時間軸に沿った展開が疾患の予後 (*prognosis*) となることから、医学の大変革をもたらすことを示唆している。実際、このベーコンの方法の成果は、その後の近代医学とりわけ 19 世紀以降の科学的医学の歴史の進展が如実に示している。

- (3) ベーコンにとって、自然の過程は人ではなく神がつくったままの世界であり、人の想像 (*imagination*) が排除されることによって見出される世界であった。そしてこの自然の過程は、人を取り巻く外的環境である大自然の過程だけでなく、人の内的環境である心の自然の過程でもあった。この心の自然の過程を「心の自然な傾向」とベーコンは呼んでいる。心の自然の過程は、大自然の過程と同じく人ではなく神がつくったままの世界であり、人の想像が排除されることにより見出される世界である。それは人の偽装による隠蔽と人の規律による抑止とが取り除かれたときに見出される世界であり、心の自然の傾向を見出すのが観相学であることを指摘している。

それゆえすべての観相学 (*physiognomy*) において、体の特徴 (*the lineaments of the body*) は、偽装が隠し規律が抑制している心の自然な傾向を見出す。

8. 想像と想像力

前章で述べたように、物質の中のスピリットに焦点を当てて自然の過程を把握するというベーコンの方法は、自然の過程は人ではなく神がつくったままの世界であることから、人の想像 (*imagination*) を排除する必要があった。ホワイトヘッドがベーコン的帰納法 (*the Baconian method of induction*) と呼ぶこの自然哲

学の方法論は、事物の存在に始まり事物の存在に終始し事物の存在を離れないという徹底的な方法論であり、自然の全体を対象として分析を進めるために想像の過程を一切認めないという特徴がある³⁾。しかしどうしてベーコンは想像を徹底的に排除する必要があるのか。その原因を追究することを目的として、“シルバ・シルバールム”において想像の定義について述べている十世紀パラグラフ 945. と想像力とスピリットの関係を述べているパラグラフ 957. を採りあげる。

(1) ベーコンは、想像の力が他の物体 (bodies) に及ぼす影響について論じるに際して、想像を次のように把握している。

想像は、個人の思考の再現 (the representation of an individual thought) であると理解する (パラグラフ 945)。

個人の思考の再現としての想像は、思考である想像が、個人の思考の展開に沿って再表現されたものと理解することができる。この個人の思考についてベーコンは、意識的思考と考えていたように思われる。しかしながらベーコンは、心身二元論に基づいて“我思うゆえに我あり”と表明するデカルト (1596-1650) と同じ意味において思考は一般的に意識的思考であるとは考えていなかった。なぜなら 17 世紀を支配する物理学に沿った思考の枠組みの外にあって物質を能動的物質と把握していたベーコンにとって、思考は個人の意識内に限定されるものではなく、物質内のスピリットと連動しているものであったからである。

人の思考と物質内のスピリットとの連動は、意識と無意識の連動の問題である。意識がその対立する相手である集合的無意識 (引用者注：人類共通の無意識) との間で成長による乗り越えを行いさらなる心的発展を遂げるという人の心性のダイナミズムを指摘したのは C.G. ユング (1875-1961) である。ユングにとっての個人の思考は、意識的な思考だけでなく集合的無意識的な思考を含むものであった⁶⁾。集合的無意識は、身体の解剖生理学的自然に礎をもつ心性である⁶⁾ ことから、それはベーコンのスピリットによる思考ということができる。それゆえベーコンが「心の自然な傾向を隠蔽する偽装とそれを抑止する規律」というとき、この偽装や規律は、スピリットが担う集合的無意識の思考から切り離された意識だけから発せられた思考であると思われる。心の自然な傾向を隠蔽する偽装とそれを抑止する規律は、意識的思考の再現でありそれゆえに想像の働きと捉えることができる。

(2) 想像を論じるに際してベーコンは、①想像する側、②想像の力、③想像の力が及ぶ対象の三者を区別している。そして想像の力が及ぶ対象には、①想像する側の体、②死体 (dead bodies)、③人や生物のスピリットの三種類があることを指摘したうえで、このうちの 3 番目だけを取扱うと表明している。

想像の力は三種類ある。一つは母体の子宮の中の子どもを含む想像者の体への力であり、二つ目は植物や石や金属など死体への力であり、三番目は人や生物のスピリットへの力である。この三番目だけを取扱う (パラグラフ 945)。

この想像の力が影響を及ぼす人や生物のスピリットは、生物スピリット (vital spirits) である。ベーコンは、“生と死の自然誌”のなかで、人の個別の臓器と組織の中には、石の中に存在するのと同様の無生物スピリット (non-living spirits) が存在しているが、生きている個体には、無生物スピリットに加えて生物スピリット (vital spirits) が存在すると述べている²⁾。

(3) 想像の力が人や生物のスピリットすなわち生物スピリットに及ぶのは、軽くかつ動きやすいというスピリットの性質にあることを指摘している。

どんなものにおいて想像はもっとも効力を有するのか。その規則は、最も軽く最もたやすい運動を有しているものにおいてである。それゆえとりわけ人のスピリットにおいてであり、人のなかでは愛の獲得や常に想像とともにある縛る欲望や恐れる人や優柔不断の人などのような最もかるやかに動く気持ちにおいてである (パラグラフ 957)。

人の意識と自身の身体が相互に影響を及ぼし合っていることは、心身症と呼ばれる疾患の存在により臨床的に確認されているだけでなく、後述するように神経生理学的にも裏付けられている事実である。心身の相関は、オキシトシンなどの血液を介して移動するホルモンを分泌する内分泌系と神経インパルスの伝導による自律神経系により担われているが、ホルモンにせよ神経インパルスにせよ、「軽くかつ動きやすいスピリットの性質」を有している物質ということができる。

9. 想像の力の伝承と流入

(1) 非物質的効力と想像の力の伝承と流入について述べている十世紀解説 (pp.640-641) において、古代

ギリシアのピタゴラス哲学にはじまるひとつの想像が人々の心へ移植されたことが、その後「世界がひとつの全体的な生きものである」という思念、さらには spiritus mundi (宇宙靈魂、世界靈魂) という思念に発展して西洋社会の人々に甚大な影響をもたらしてきたことを指摘している。

ピタゴラスの哲学は初めて恐るべき想像を植えた、その後でプラトン学派などによって水遣りと栄養補給が行われた。それは、ピタゴラス派の予言者であるティアナのアポロニウスが、海の干潮は水をひきつけたりまた戻したりする世界の呼吸であることを確信したように、世界がひとつの全体的な生きものであるとした。彼らはさらに、もし世界が生きものであるならば、それは世界の魂或はスピリットと呼ぶ spiritus mundi と呼ばれる魂とスピリットをもつと推理した。彼らはそれを神とは言わなかった (なぜならその他に神的存在を認めていたからである)、ただ宇宙の魂即ち本質的形相とした。

- (2) spiritus mundi を礎にすると、天使やスピリットによる取り次ぎ (協働) を経ることなく、自然の統一と調和という論理の言葉により人の恣意的な望みの物が樹立されるようになることをベーコンは例示して述べている。

(例えば) ここヨーロッパにいる私たちが、中国でなされたことの間接的感覚と感情をもつことになるように、私たちは物がなくても物に反しても結果を生むことになり、それは天使やスピリット (引用者注: ベーコンのスピリット) の協働によらず、ただ自然の統一と調和 (引用者注: 機械的自然の歯車の動作) によってである。

ここではベーコンは、spiritus mundi の思念が、天使や身体の内発的な主体性であるスピリットによるコミュニケーションを導かず、物理学に沿った思考すなわち外からの力に作用される受動的物質 (passive matter) に基づいた物理学に沿った機械論的思考を醸成することを指摘している。

- (3) さらに spiritus mundi の思念からは、医師でありかつ錬金術師であったパラケルスス (1493-1541) のように人という小宇宙による自然の支配というところでもない想像が生まれてきたことを指摘している。

これにとどまらずさらに、小宇宙 (microcosm)

と呼ぶ人のスピリットが、強い想像の行為と信念の行為によって世界のスピリットに触れるなら、それは自然を支配するというものもある。なぜならパラケルススのような魔法の邪悪な著者は、奇跡を起こす信念力を高揚された想像に帰しているからである。このようなとんでもない底抜けの狂気で人々は愉快がらせられてきた。

上述したプロセルピナ寓話で表明しているようにベーコンは、パラケルススをはじめとする錬金術師による死からの生還というゴールを否定しないが、それを賢者の石という学術の無い単純な方法で実現を目指す方法論に根拠がないとして否定している。“シルバ・シルバールム”の十世紀解説においてベーコンは、その否定の根拠を示している。それは彼らが想像に基づいてその探索を進めたことにある。

- (4) ベーコンは、このような恐るべき想像に対決する方法として、①神の仕業および神のランプである感覚に基づくこと、②自然の経過の中に侵入する想像の言葉である非物質的効力 (immaterial virtues) を排除すること、③自然の経過に及ぼす想像の力の帰結を分離することを挙げ、その仕事は、ヘラクレスが30年間掃除したことがなかったアウゲイアスの牛小屋を1日で掃除したように行うものであることを指摘している。

しかしわたしたち、神の仕事および神のランプである感覚に基づくものは、覚めて厳格に、自然の足元に非物質的効力の転移と侵入が見つかるかどうか、想像者の身体や他者の身体における想像の力とは何か、それは迷信と魔法のアートと観察から、明晰で純粋に自然であるものを分離するために、アウゲイアスの牛小屋を排除するヘラクレスの労働 (引用者注: ヘラクレスが30年間掃除したことがなかった牛小屋1日掃除したこと) のようであるのかを探求する。

10. 経験からの受容

- (1) このような恐るべき想像に対決する方法については、経験からの受容についての十世紀パラグラフ 999. (pp.671-672) において、医師による黄疸患者の治療がうまくいかない時の医師の工夫の仕方を挙げて説明している。

医療において、黄疸を治そうとするなら、薬は冷

却してはいけないというだけでは不十分である。なぜならそれは病気が要求する開口を妨げるからである。それは温かくあってはならないというのも同様である。なぜならそれは胆汁をいらだたせるからである。それは胆嚢に行かなければならないというのも同様である。なぜなら病気を引き起こす閉塞があるからである。

- (2) ベーコンは、経験から受容することの必要性を指摘している。そして賢明な医師は、最初の薬が奏功しなければ同じ薬を続けなくて、変更してその薬が体に合っているかどうかを経験によって判断していることを述べている。

そうではなくあなたは、ビールに入れて飲む *Chamaepitys* (引用者注：シソ科の植物) の粉などが黄疸に効果があることを経験から受容する必要がある。それゆえ繰り返すと、賢明な医師は患者に同じ薬を続けはしない。最初の薬が成功しないようならば、彼は変更する。なぜなら黄疸や結石によい治療法のうち、薬がもっている個々の身体に対する呼応に従って、ある身体によいものは他の身体にはよくないからである。

11. 人のスピリットの全般的交感

- (1) 人のスピリットの全般的交感 (the general sympathy of men's spirits) について述べている“シルバ・シルバールム”の最後のパラグラフであるパラグラフ 1000. において、人のスピリット全般が有している交感的性質すなわち人々から慕われること、名声、名誉、他者の心・意志・愛情の服従と従属の喜びについて述べている。そしてこの人のスピリットの性質は、心の質の高低に従って、名声と真の名誉の欲求、人気と称賛の欲求、服従と暴虐行為の欲求となって現れることを指摘している。そして偉大な世界の征服者や騒乱を引き起こす者だけでなく、大異端者に見られるのも服従と暴虐行為の欲求であることを指摘している。

人が持つ、人々から慕われること、名声、名誉、他者の心・意志・愛情の服従と従属の喜びは (これらは他の目的のために願われるものの)、帰結を考へることなく、人の自然にとって気持ちよく心地よいものであるように思われる。このことは (確かに)、すべてのスピリットと魂は一つの聖なる辺縁に由来しているのかのように意味のあることである。

もしそうでないなら人はどうして他者が考えたり言ったりすることにそれほどまでに影響されるのか。心の最も落ち着きのある者は名声と真の名誉を願う。心がより軽薄な者は、人気と称賛を、心がより墮落した者は、服従と暴力支配を願う。それは世界の偉大な征服者やもめごとを引き起こす人にみられるが、大異端者においてはなおさらである。なぜなら新たな教理を導入することは、同様に人々の理解と信仰に対する暴力支配の装いであるからである。

一般的に、交感 (sympathy) は、ある決まったものの間の親和性をいう。「人のスピリットの全般的交感」は、人々のスピリットの間にみられる親和性の指摘である。人々から慕われること、名声、名誉、他者の心・意志・愛情の服従と従属の喜びをベーコンは人のスピリットの全般的交感と呼んでいる。これらの喜びが「人の自然にとって気持ちよく心地よいもの」であることから、それらは人の意識の恣意的な想像ではなく、人のスピリットの働き (交感) であるとベーコンは判断している。

この判断の帰結はとても大きいもののように思われる。なぜならこれらの欲求は、全く別個のものではなく、ルーツは同じであるが心の状態によって異なる表現型になっているものと考えられるからである。それゆえに服従と暴力支配の欲求は、元となるスピリットの働き自体の問題ではなく、そのような表現型を醸し出す心の質的な状態の問題である。また、偉大な世界の征服者と大異端者は、それぞれの欲求の対象が異なるものの暴力支配を内容としていることにおいて同じ穴のむじなということになる。

ベーコンの人のスピリット全般が有している交感の指摘は、自律神経機能による脳-体のコミュニケーションに関する S. W. Porges のポリヴェーガル理論⁷⁾の予想であることとらえることができる。そこで次章において人のスピリットの全般的交感的性質とポリヴェーガル理論について考察する。

12. 人のスピリットの全般的交感とポリヴェーガル理論

人のスピリットの全般的交感とポリヴェーガル理論の関係を吟味するために、まずポリヴェーガル理論について述べる。

1) ポリヴェーガル理論

ポリヴェーガル理論は、幼児、子ども、大人の全世

代に必要な愛着と社会的絆の形成とその神経生理学的機序である社会的関与 (social engagement) をリンクするモデルである⁷⁾。人の神経系は、意識的自覚とは独立して、体内外の環境のリスクを無意識的に評価している。この無意識的な安全の評価を Porges は neuroception (無意識の脳覚) と呼んでいる。この無意識の脳覚による安全、危険、生命への脅威の汲み取り (無意識的知覚) に応じて、適応反応の表現が規制されている。

人を含む哺乳類の自律神経反応は、進化の系統発生前、新しい順番に、①有髄迷走神経による社会的関与・ケア提供、②交感神経による動的反応、③副交感神経 (無髄迷走神経) による不動反応の3つの反応がある。そして安全が確保できない状況では系統発生的により古い防御反応の交感神経反応あるいは副交感神経 (無髄迷走神経) 反応が適応行動として動員されることが知られている。その例としては、交感神経による闘うか逃げるか (fight or flight) 反応や副交感神経 (無髄迷走神経) による血管迷走神経性失神などがある。

一方、無意識の脳覚が安全を汲み取ると、適応行動として社会的関与行動が可能になるとともに、生理的状态の改善と社会的支援をもたらす。この無意識の安心の脳覚が前提となる社会的関わり (social engagement) は、頭頸部の筋肉をいかにうまくコントロールするかにかかっている。顔面の筋肉はアイコンタクトなどの表情を生み、頸部筋群は身振りを作り、声に張りを与え、眼差しを導き、背景雑音から人の声を際立たせる。これら頭頸部筋の皮質延髄路を介する神経支配によって人の間の社会的距離を減少させる。この皮質延髄路は、生まれたときには十分に機能しているため、生まれたての赤子は乳母に発声としかめっ面でシグナルを送り、見つめたり笑ったりしゃぶったりして乳母に欲求を伝えている。

人のスピリットの全般的交感の各要素からなる。①人々から慕われること、名声、名誉、他者の心・意志・愛情の服従と従属の喜びは、人の自然にとって気持ちよく心地よいものであるように思われるものであること、②これらは、人の意識の恣意的な想像ではなくて、人のスピリットに由来すること、③名声と真の名誉の欲求、人気と称賛の欲求、服従と暴虐行為の欲求の違いは、同じスピリットの働きが心の質的状态に応じて異なる表現をとるためであること。

次に人のスピリットの全般的交感とポリヴェーガル理論の関係について比較検討する。

2) スピリットの全般的交感の各要素とポリヴェーガル理論

①の要素について：人々から慕われること、名声、名誉、他者の心・意志・愛情の服従と従属の喜びは、愛着と社会的絆の表現であると理解することができる。そしてこれらの愛着と社会的絆の表現が、人の自然にとって気持ちよく心地よいものであるように思われるものであるのは、無意識の脳覚が安全を汲み取ると、適応行動として社会的関与行動が可能になるとともに、生理的状态の改善と社会的支援をもたらす得るからと理解することができる。

②の要素について：頭頸部筋の神経支配 (皮質延髄路) によって頭頸部の筋肉をうまくコントロールすることで、人々の間の社会的距離を減少させるように働く社会的関わり (social engagement) は、生まれたての赤子が乳母に発声としかめっ面でシグナルを送り、見つめたり笑ったりしゃぶったりして乳母に欲求を伝えているように、生まれたときから十分に機能していることから、「意識の恣意的な想像ではなくて、人のスピリットに由来するもの」と考えて矛盾しない。

③の要素について：上述したように、無意識の脳覚が安全を汲み取ると、適応行動として社会的関与行動が可能になるとともに、生理的状态の改善と社会的支援をもたらす得るが、無意識の脳覚が安全を汲み取れない状況では系統発生前においてより古い反応である防御反応が適応行動として動員される。無意識の脳覚が安全を汲み取れるか汲み取れないかによって、社会的関与の行動、交感神経による動的防御反応、副交感神経 (無髄迷走神経) による不動の防御反応の3つの反応が現れる。

この3つの反応がスピリットの働きであり、そして無意識の脳覚における安全の汲み取りの有無が心の質的状态を規定するものと理解することができる。そうするとスピリットの3つ反応は、無意識の脳覚における安全の汲み取りの有無に応じて人の欲求の表現を規定しているということができる。

13. おわりに

ペーコンは、希望を長生におおいに寄与する想像と捉えている。“生と死の自然誌”において、「すべての感情のうち、希望がもっとも有益で長生におおいに寄与する、ただしそれがあまりにも失望されず、見込みのある期待 (fair prospects) でその空想 (the fantasy)

を養うならば」と述べている³⁾。そして希望の喜び (the joy of hope) は、薄く広げることができるので金で作られた金箔のようであると総括している。これは、希望という空想をほどほどの見込みのある期待で養う方法である。それは無意識の脳覚が安全を汲み取れるように状況を管理することである。ベーコンは、人生の中に目的やゴールを設計し設定して常にすこしずつそれに向かって働く人は一般的に長生すると述べた後で、「しかしそれは希望の高みに到達して期待するものがもはや何もないときには、生の喜び (their joie de vivre) が枯渇して長持ちしないやかたである」と述べている³⁾。この表明は、期待がなくなれば、無意識の脳覚が安全を汲み取れない状況をもたらすからであると理解することができる。生の喜び (their joie de vivre) は、意識の喜びではなくスピリットのよろこびすなわち無意識の脳覚が安全を汲み取った後の有髄迷走神経の働きによる社会的関与の実現である。

ベーコンの生活の組織化と感情の管理による長生法は、人の自然の過程を支配するスピリットを人の想像の力が及ぼす悪影響から守ることに基づいている。それは、ポリヴェーガル理論によれば無意識の脳覚が安全を汲み取った後の有髄迷走神経の働きによる社会的関与の実現を育むことであると理解することができる。

引用文献

- 1) 藤井義博. フランシス・ベーコンの“生と死の自然誌”における生活の組織化と感情の管理による長生. 藤女子大学 QOL 研究所紀要 2019; 14: pp. 33-44.
- 2) 藤井義博. フランシス・ベーコンの“生と死の話”とクリストフ・ヴィルヘルム・フーフェラントの“マクロバイオティック”における長生法の相違. 藤女子大学 QOL 研究所紀要 2017; 12: pp.13-23.
- 3) 藤井義博. フランシス・ベーコンによる Cupid 寓話の解釈と彼の物質論の視野：スピリット論の形態の物質論を礎とした長生法の現代的意義. 藤女子大学 QOL 研究所紀要, 15(1), 25-35, 2020.
- 4) Stephen Gaukroger. Francis Bacon and the transformation of early-modern philosophy. Cambridge University Press, New York, NY, USA, 2001, p. 212.
- 5) A N whitehead. Science and modern world: Lowell Lecture, 1925. The Free Press, NY, USA, 1967, p. 42.
- 6) C. G. Jung. The Collected Works of C. G. Jung Vol. 9, Part I The archetypes and the collective unconscious, translated by R. F. C. Hull. Princeton University Press, Princeton N.J. USA 1968.
- 7) S. W. Porges, The Polygonal Theory: Neurophysiological Foundations of Emotions, Attachment, Communication, and Self-Regulation. New York: W. W. Norton & Company, 2011.

The scope of Francis Bacon's spirit

— prolongation of life through protection of the spirits against the power of imagination —

Yoshihiro FUJII

(Department of Food Science and Human Nutrition, Faculty of Human Life Science, and
Division of Food Science and Human Nutrition, Graduate School of Human Life Science, Fuji
Women's University)

